雑事記（38）

戦争遺跡探訪（11）

盛丘 由樹年

今回は、最近探訪した七つの項目を取り上げる。日付順に記述し、撮影した写真を添える。

①池子弾薬庫跡（神奈川県逗子市）2020/11/28

池子（いけご）といえば、今ではアメリカ海軍の軍人家族が住んでいることで知られているが、戦時中、この地区は、主に旧海軍の弾薬庫として使われた。「池子弾薬庫」と呼ばれた。戦後アメリカ軍に接収され、継続的に、ベトナム戦争の終結時（１９７０年代）まで弾薬庫として使用された。

朝鮮戦争やベトナム戦争で、ここも後方支援施設の一つだったわけだ。その間に、弾薬庫らしく（？）１９４７年１１月に大きな爆発事故が記録されている。１９７４年には、不要になった弾薬の処理で連続的に爆発音を響かせたから、周囲の住民たちを怯（おび）えさせた。

１９９０年代から、市長をはじめとする地元住民の反対運動にも関わらず、この跡地は軍人用住宅地に転用された。池子米軍家族住宅といい、アメリカ軍が占有する軍用地のひとつだ。広い面積を有しているが、一部の地域が日本側に返還されている。

その部分が「池子の森自然公園」であり、緑地エリアと、スポーツ施設として整備されたエリアとがある。限定的ながら、一般の人が利用できる。

その緑地内に、戦時中の名残をとどめる跡（引込み線など）があるというので、私は行ってみることにした。

地図を広げて道順を検討していると、熊野神社の近辺に横穴墓群があることに気づいた。そこは逗子駅と池子の森の入り口の一つ（久木側入り口）のほぼ中間点にあるので、逗子駅から歩いてみることにした。これは、別の「遺跡巡り」だが……。

熊野神社に形だけの参拝をしてから、その横手の斜面を登ると、確かにあった。横穴墓跡が十基ほどある。かなり自然に近い形で残されているので、好感を持った。

そこを見てから、そのまま尾根に上がった。ハイキング気分で丘陵の尾根筋をたどり、少々迷いながらも「久木側出入口」にたどりついた。そこから池子の森公園に入った。特定の入り口以外は、フェンスに囲われているから、入れない。

この日は天候もよく、散歩するのにちょうどよかった。開けた平地の中に水路や池があったりして、環境がいい。背の高い雑草は生えていない。刈り取られているのだろう。広々とした谷間の両側には、小高い山が広場を囲うように続いている。その斜面には、雑木が生い茂っている。

熊野神社の横穴墓群
不審者が横穴の中を覗き込んでいた

池子の森自然公園の一光景
木が生い茂る山間部に、広々とした平地と水辺がある

斜面に沿ってよく見てまわると、大きい横穴がいくつかあった。開口部は2メートル近い高さがある。ひ

っそりと、黒い口をあけている。ほとんどの横穴は、鉄柵で覆われ、中に入れない。一部は、コンクリートブロックで入り口がきっちりふさがれている。

山側の斜面にある大きめの横穴の一つ
フェンスでふさがれ、一般人は中には入れないし、立ち入り禁止札が掲げられている

これらは、戦時中、物資を隠匿するために掘られた軍用の横穴であり、中に弾薬が貯蔵されていたわけだろう。一定の間隔を空けて分散して作られていた。

貯蔵物資を運ぶための軌道（レール）があったとされるが、この公園内ではすでに撤去されたらしく、その跡も残っていなかった。

この公園には、奥へ続く道がいくつかあるが、通行止めの鉄の扉に行き着く。その先が米軍管理区域であることが意識させられる。

緑地エリアからトンネルを抜けてスポーツエリアに入り、郷土博物館を見て回った。帰りは、京急・神武寺（じんむじ）駅を利用した。池子の森へ行くには、この駅が一番近い。

私がホームで電車を待っていたとき、線路の近くに不思議な建物があるのにいぶかった。人がいる気配はなく、何のための施設かわからなかった。米軍管理区域にあるから米軍施設にちがいないが……。

しばらく眺めていると、ちょうど、米軍の家族らしい母子がここからホームにあがって来た。乗客が線路を渡って来るのも、珍しい光景だ。それで私は納得した。

これは、彼ら専用の駅舎なのだ。調べてみると、米軍住宅エリアと隣接していることから、その住民たちが電車で出かけるのに便利なように、２００８年１０月に設置されたものだ。もしも、私のような不審者が

英語の注意書きを無視してそこから入ろうとしたら、銃を腰に下げた迷彩色の服を着たヤンキーが飛んでくるのだろう。無人駅に見えるが、監視カメラで常に見張っているにちがいない。

米軍家族専用の神武寺駅舎
（プラットホームから撮影）建物上部に
CFAY IKEDO DETACHMENT
JINMUJI STATION
の表示文字が見える。手前に線路がある

②陸軍戸山学校跡（東京都新宿区）2020/12/11

私は早稲田大学・大隈庭園を見に行くついでに、戸山公園を縦断して歩いた。地下鉄・東新宿敵から北東方面に歩いてゆく。戸山公園の周囲には、中層建築の集合住宅（戸山団地）が建ち並んでおり、その住民たちが憩う場所としてちょうどよい。起伏に富んでおり、なかなかの環境だ。

この戸山地区一帯は、戦時中、旧陸軍が占有していた。陸軍戸山学校だった。陸軍歩兵学校や、さらに陸軍軍医学校・陸軍病院があった。それらの施設は戦後、ほとんど取り壊され、別の施設に変わっている。

その名残というべきものがいくつか残っている。そのひとつ、兵隊の射撃訓練のための「射撃場土塁」の跡があるというが、このとき私は見落とした。

戸山公園の中央付近に戸山教会と、併設された幼稚園がある。それらの土台となっている施設が、戦時中、将校の集会場だった。陸軍戸山学校の数少ない遺物だ。教会の裏側に回ると、地下施設のような石造りの重厚な建築物がよくみえる。

旧陸軍戸山学校の施設跡
重厚な石造りの部分。これを土台にして教会が建てられている。

私は近くにある箱根山（標高４５メートル）に登った。これは江戸時代、尾張藩が庭園の一景として造った人工の山（築山）だ。頂上で地元の人らしい高齢の人がいたので、あの建造物について聞いてみた。彼は軍の学校施設だったことを知っていた。そこは将校たちの交流の場として使われたという。周辺に隠れた地下施設があり、一度、陥没事故が起き、子どもがけがをしたことがあった、などと語った。

そこを降りてから、軍楽隊の野外演奏場跡といわれる場所を歩いた。なお、作曲家でエッセイストだった團伊玖磨（1924～2001）は、戦時中、二十歳の時、音楽学校在籍中に徴兵され、この軍楽隊に入隊した。彼がここで演奏していたと思うと、私的に尊敬していた人だから、感慨深い。この軍楽隊で芥川也寸志とも知り合ったから、ここでの活動が彼の音楽経歴の上で、まったくのムダにはならなかったことになる。

そして早稲田大学に向かった。それまで私は講演会や展示会の機会に時々訪れていたが、次のところには足を踏み入れていなかった。

一つは、会津八一記念博物館の裏庭だ。そこで、事前に想定していた以上の多種多様の韓国系石像に会えて少々感激した。典型的な文人石や童子石、羊石もあった。

次に大隈庭園に入ると、紅葉を落としつつある樹木がところどころにあり、手入れの行き届いた、みやびな庭園にまたまた感動した。

早稲田大学にある素朴な石像
会津八一記念博物館の裏庭にひっそりと置かれている。この二体以外にも複数あった。

③平河天満宮・戦災と銃痕跡（東京都千代田区）
2021/2/23

２月２３日の祝日、私はいつもより早めに起きて、東京へ行った。地下鉄・半蔵門駅から歩いて５分ほどの近さに平河天満宮がある。（実はもう一つ目的があって、駅前にある仏教系の「半蔵門ミュージアム」を訪れようとしてが、この日は休館日だった）

平河天満宮は、都会の真ん中で雑多な建物に囲まれ、肩身の狭そうな神社だが、江戸時代から由緒のあるもので、存在感を押し出している。社殿がコンクリート作りで、華麗さを見せている。

私が境内をうろうろすると、老若男女の参拝者が次々にやってきて、手をあわせ、礼をしていた。ご利益があるのだろう。多くの絵馬やおみくじが目に付く。

私は神頼みをしに来たわけでなく、戦争の跡を探しにきただけだ。古い石牛に空襲の跡があるとの情報〔毎日新聞の夕刊（2021/2/17）新２０世紀遺跡〕を得ていた。この神社も戦災にあっている。

ちなみに、天神として祭られている菅原道真（845～903）は、遣唐使として任命されながらも、乗船を渋り、駄々をこねて遣唐使自体を廃止させたゴリ押し的な人物として捉えているから、私は参拝する気になれない。唐への航海では遭難する危険が高かったとはいえ、外交の職務を放棄した人た。それだけでも左遷に値する……。

私には、この遣唐使の廃止が元寇（1274年と1281年の二回）を招いた遠因とも思えるのだ。彼は「唐か

ら学ぶべきことはもうない」と豪語したそうだが、それは現地を見てから言うべきことだろう。

そもそも、天神と菅原道真を同一視することに、無理がある。

損傷のある石牛
首に注連縄が巻かれている。この石像は角などを失っているから、牛には見えにくい

この境内には、天神社らしく、大きさ1メートルほどの五、六体の石牛（多くは戦後に奉納されたもの）があり、真新しい注連縄（しめなわ）を首につけている。その中の一体が古いもので、顔の形状がわからないほど、かなり損壊している。戦災にあったというのはこれだろう。

この石像は全体的に磨耗しているような状態で、欠けた部分がいくつかある。空襲によるものだろうけれど、風化したもののようにも見える。やや不確かな情報だったから、お守り品売場にいる人にでも声をかけて、確かめるべきだった。

見て回りながら、鳥居の傍らにある案内板を読むと、そこに空襲の銃撃跡があることを知った。案内板に書かれていることだから、こちらは確かなことだろう。その説明がなければ、見落とすところだった。私にとって、ここでそれを知ったことが大きな収穫（天神様のご利益？）だった。

それにしても、米軍戦闘機のパイロットはこの鳥居を目標にして機銃を撃ったと思われるが、なんと罰当たりなことをしたものだろう。天神なら、パイロットにイナズマの一撃でもくらわせたら、どうだったか。

弾痕のある鳥居の柱
銅板ぶきコンクリート製の鳥居の柱には、銅板が丸くはがれている部分が１０カ所ほどある。植栽の影で、やや見にくいが……

④茂原の掩体壕群（千葉県茂原市）2021/3/9

新茂原駅の東側の平地に、掩体壕が点在しており、１１基ほど残っているという情報（最近の茂原市の公式サイトでは１０基になっていた）は前から知っていたが、今回訪れて見て回ることにした。掩体壕なら、東京・府中にあるものなど、いくつかのものを見てきて、これまでの探訪記に記述してきたから、今まで私にはこの探訪を躊躇する気分があった。でも、１０以上のものがまとまって残っているのは貴重だろう、と思い直した。

茂原市には海軍航空隊の飛行場があった。１９４１年から田畑をつぶし、民家１５０戸を押しのけて急遽造成したもので、南北に長い滑走路（１０００メートル）を備えていた。

住民が立ち退きに不平不満をつぶやこうものなら、特高警察がやってきて拘束されたという話がある。非国民扱いされたわけだ。全国各地に造られた飛行場でも、同じ状況だろう。

ここに配備された軍用機、主に零式艦上戦闘機（ゼロ戦。終戦時には、その五二型７３機を含む計８５機が連合国側に引き渡された）を隠すための掩体壕が周辺に２０基以上作られた。

新茂原駅周辺の掩体壕群は、飛行場の北部に位置し、その多くは個人所有の土地にある。茂原市で管理されているものが例外的にある。コンクリート造りの強固なもので、解体するにしても手間隙かかるから、残されたものだろう。しかし、個人所有者にとってはジャマな存在になってきた。約８０年の時が流れて、風化

してきた。管理保存する仕組みがないと、そのうちなくなってしまう。

当時の日本軍には、戦闘機など軍用機の頭数が根本的に不足していた。たとえそろっていたにしても、燃料がろくになかったし、その質も悪かったので、ほとんど飛ばすことができなかったし、空中では優秀なアメリカ戦闘機に太刀打ちできなかったから（次々に撃ち落された）、なけなしの戦闘機を掩体壕に隠し、連合軍の空襲に耐え忍んでいたわけだろう。それでも戦功に焦る軍部は、本土決戦になれば、それで「一撃」できるものと考えていた。温存のためであり、すぐに飛ばすものではないから、滑走路からかなり離れたところにも掩体壕は作られた。

本土決戦とは、日本にとって孤立無援の絶望的な戦いになることがわかりそうなものだが……。

３月９日（火）６時に起きて、私は千葉の外房方面に向かった。わが最寄り駅から４本の電車を乗り継いで、新茂原駅に降り立ったのは１０時２０分になっていた。

なお、新宿駅から特急の「わかしお」があって、茂原へ行くには一番便利なのだが、「贅沢は敵だ」の精神（？）で、ここは遠慮した。

さて、多くの掩体壕を見て回りたい私は、効率よく見て回れるように、存在場所の把握につとめた。事前に、地図上に大まかな位置をプロットした地図を用意した。

これはゲーム感覚だ。探索ラリー（スタンプラリーのまねごと）ということにしよう。私なりのルールを挙げると、

・紙の地図を持って歩く
・新茂原駅を基点とし、かつ終点とする
・掩体豪を探し当てたら、写真を撮ること
・地元の人に場所を聞いてもよい

最初に出会ったのが、「掩体壕その一」だ。その一とは、私が発見した順番を示すものとする。新興住宅地を抜けた先に、広い空き地の中にあった。かなりの大きさがあるから、遠くからでも一目でわかった。近づいてよく見た。アーチ型のコンクリートの構造物。凸形の広い口をあけている。その口をふさぎように、作り付けの建材による壁があるが、半分壊れている。入り口のドアは開いていた。

おそらくそれらは、掩体壕を倉庫などに利用するため、戦後に改変されたものだろう。今はその役も終えている。

一番有名なのが茂原市で管理・保存している「掩体壕その二」であり、地元の人に単に掩体壕と言うと、ここに案内されてしまう。私も比較的容易に探し当てた。

茂原の掩体壕 その一
これは資材置き場として使われていたらしいが、今では廃墟の様相を呈している。コンクリートにひび割れが入っており、今にも崩落しそう

県道２９３から横道に入っていくと、円墳型古墳のような盛土が見えてくる。回り込んでみると、立派なコンクリートの正面構造の前に出る。そばに説明の看板が立てられており、一通りの説明がされている。中に入らないようにするための、申し訳程度のロープが張られている。

茂原の掩体壕 その二
茂原市の「戦争遺跡」として管理されている。案内板が設置されているから、わかりやすい。コンクリート構造の上部は土で覆われ、空から見つけにくい工夫がされている。例によって不審者が写りこんでいる。

県道に戻り、先を行くと、「その三」がある。これは畑の真ん中にあるから、見つけやすい。

茂原の掩体壕 その三
畑の中にあって、幹線道路からよく視認できる。これは後ろの部分になる。爆撃されたときに爆風を後ろに通すための穴がある。その他のものも同様な造りになっている。

私は、あらかじめプロットした地図（おおざっぱなもの）ではなかなか見つけられなかった。通りがかった人の何人かに聞いたが、指示されたところに見つけられなかったことが大きかった、とぼやいてみたくなる。

私「この近くに掩体壕がありますか？」
農作業者「あの信号（はるかむこうに見えていた）の先に、小さいのがあるよ。すぐそばだよ」
私は急いで行ってみたが、すぐそばにはなかった。近ごろの地方都市では、古い建築物が解体され、更地になっていることはよくあることだが……。

その後ようやく見つけたものは、個人宅の広い庭の中に「築山」として存在していた。周囲の屋敷林にほとんどさえぎられ、識別が困難なものだった。私も見逃すところだった。それを「その四」とするが、写真の掲載を控える。
結果的に、この日の私は3時間歩き回って、不本意ながら、4基しか見つけられなかった。比較的大きな構造物だから、簡単に見つけられるだろうと思ったのが間違いだった。でも、発見したときにはそれなりにうれしい。
車が走りゆく、長い直線道路のわきをとぼとぼと（ときにはせかせかと）歩くのは大変だった。見知らぬ路地に入り込んだりして、疲労と焦りで困憊（こんぱい）した。時間に関して、探索ラリーの制約に入れなかったが、3時間で打ち切った。

⑤大房岬（たいぶさみさき）の要塞跡（千葉県南房総市）2021/3/14

大房岬（たいぶさみさき）自然公園に東京湾要塞の跡が比較的よく残っているという情報を聞きつけ、3月14日（日）に行ってみた。空は晴れて暖かい日だった。

しかし、大房岬はかなり遠かった。房総半島の南端に近く、館山の北に位置する。何本かの電車を乗り継ぎ、JR富浦駅に降り立ったのは11時半になっていた。最寄り駅で6時49分発の急行に乗ったのに、こんな遅い時間になったのには、想定していたとはいえ、うんざりだった。さらに大房岬までは2キロ以上あるから、バスで行かなければならなかった。駅前でバスを待つのは私一人。バス停の表示板を見ると、バスに乗るためには、事前に電話する必要があることを知り、唖然呆然！　大房岬とは、鳥も通わぬような、そうとう辺鄙（へんぴ）なところなのかと、思ってしまった。

なんとか、バス（運転手が親切だった）で大房岬に来てみると、家族連れやカップルの姿が多いことにおどろかされた。彼らは車で来ていたのだ。瀟洒（しょうしゃ）なホテルも建っているから、高級なリゾート地のようにみえる。電車で来るような人は、野暮？

東京湾要塞は、東京湾上の第一～三海堡や、三浦半島や房総半島の要所に築造された砲台を指し、敵国の軍船の進入に備えた一連の施設をいう。房総半島（千葉県）側にあったものを、北の方から列挙すると、

・富津元洲砲台
・金谷砲台
・大房砲塔砲台
・須崎第二砲台
・須崎第一砲塔砲台

の六カ所があった。

明治期に造られ、旧式になった初期の砲台は、大正のころに役目を終えていたが、大房砲塔砲台の場合は、昭和初期に造られ、終戦まで活きていた。この地は長く軍事施設だったわけで、一般人の立ち入りが制限されていた。

戦後、そんな場所は公園に整備される例が多い。公園の中にある遺構・遺跡などは、整備に伴い破壊されてしまうことが多いが、ここでは南房総市の指定文化財になっている。

大房岬は台地のような地形で、海岸周辺は急峻な崖になって海に落ちこんでいる。標高約80メートルの台地の上は、起伏が緩やかで、開放的だ。公園としてよく整備されており、芝生の広場やキャンプ場がある

し、いくつかの展望台が備えられ、東京湾の海や対岸（三浦半島や富士山など）を眺められる。

子どもの遊戯器具類はほとんど置かれていないが、ここには見どころが点在している。弁財天の洞窟、不動の滝、湧き水の池などもある。

私にとって、弁財天の洞窟などは見逃せない。台地の上から海岸近辺まで降りた。高低差５０メートルはあったろうか。のぞき見ることができた。この洞窟の奥深さは不明とのことだ。どこまで続いているか、わかっていない。ライトを持っていた私だが、さすがに奥までは入らなかった。これは自然の海蝕洞だろう。付近の海岸景色がなかなかのものだったが、海岸線を通る道はなく、また台地の上に戻るしかなかった。

戦争遺跡の見どころには、もちろん巡ってきた。

まず、第二砲塔跡だ。台座がレンガ造りだから、初期のころからあったものだろう。円形の中央に大砲が据えられていたわけだ、説明版によると、昭和１１年には、ワシントン軍縮会議（１９２１年１１月～２２年２月）で廃棄が決められた巡洋艦が備えていた二連装の砲塔をここに設置したとある。私は、それで軍縮したことになるのだろうかと、ふと思ったりして……。

第二砲塔跡
こうしてみると、公園の花壇に見える。

その近くの盛り土の中に、コンクリートの地下構造物がある。弾薬が保管されていたのだろう。中の様子を見るのはライトが必要だ。私はそれを持っており、中に二つの地下室があることを確認した。中に何もなかったが、空間の大きさがわかる。

第二砲塔近くの弾薬庫跡
トンネル構造で、もう一方の出入り口の光が見える。右手の横に二つの地下の部屋がある。

コンクリートの構造物が他にいくつかあるのだが、大房岬の一番の見所は、「要塞跡」だろう。

そこへ行くと、待機所のような建物とトンネルがある。ここは第二照明所跡とも呼ばれている。敵艦が侵入するのはだいたい夜だろうから、ライトで照らす必要があり、強力な探照灯を備えていたわけだろう。探照灯をエレベーター式に上下させ、格納するための遺構がトンネルの奥にある（写真の掲載は略す）。夜間のB29による空襲のとき、それで空を照らしたという話がある。

要塞跡
この建造物は兵員たちのための待機所のように見える。屋根には盛り土がされている。その上に登ることは規制されている。

探照灯の電力供給のために、発電所を備えることは当然のことだろう。

そこから少々離れたところに発電所跡があった。

また、ビジターセンターの近くに兵器庫跡があったりする。

発電所跡
この建造物も上空からは見えない工夫がされている。

台地の上を一通り見て回ってから、私は、大房岬で唯一磯遊びができるというビーチに下りていった。そこは大房岬の南面の海岸、館山湾を望む一角にある。「魚雷射堡」とされる跡を確認するためだ。また、砂浜を囲うようにそびえる崖の下に掘られた「魚雷の格納庫」といわれる洞窟もいくつかあるというから、見逃すわけにはいかない。

ネット上では、それらは「魚雷」ではなく、モーターボート型の特攻兵器「震洋」とする説がある。

私は、ビジターセンターに立ち寄らなかったが、そこには、それらの説明も表示されていることを後から知った。ビジターセンターは、それらについて「魚雷説」をとっているという。

魚雷艇発進のための軌道跡（？）
幅約２メートルのコンクリート造りで、
海面下に続いている。

海岸の岩場の近くに、「魚雷もしくは魚雷艇発射のための軌道」跡とみなれているコンクリート構造物が確かにある。板状の上面部分が割れ、両側の支えから

外れたように見える。
　魚雷艇ならば、小さい乙型でも、長さ１８メートル、幅４・３メートルの大きさだから、こんな小さな入り江での運用は無理だろう。座礁してしまう危険がある。それを隠せるような場所もない。

魚雷を格納した洞穴（？）
砂浜の海岸の背後の岩壁に開いている洞穴の一つ。中から撮影した。

　そして、背後の壁面に残る３～４本の洞窟を見て回った。自由に中に入れるのがうれしい。
　それらの洞窟の内側にノミの跡があるから、海蝕洞などではなく、明らかに人工的に作られたものだ。高さ×幅が約２メートル×２・５メートル、奥行き約２０メートルのものだ。ビジターセンターでは、魚雷をそこに格納したという説をとっているそうだ。
　人が魚雷の中に乗り込み、操縦するタイプの特攻兵器「回天（かいてん）」だったかもしれない。しかし、岩礁の多い岸辺から魚雷を単体で発射するわけにもいかないだろう。
　これらの跡は魚雷または魚雷艇のためというより、「震洋（しんよう）」の発進機構だった可能性が高い、と私には思える。大きさから、震洋を運用しようとしたものと考えるのが妥当だろう。
　震洋とは特攻兵器の一つであり、ベニヤ板で作られた、爆薬搭載の小型モーターボートの名称だ。簡単に作れたものだから、大量生産された。敵艦を爆破するために、人が操縦する。発進したら、乗員はほとんど助からなかったというシロモノだ。多くは、敵艦に当たる前に、機関銃で狙い撃ちされたことだろう。
　震洋の部隊は国内外で数多く編成された。華々しい活躍など伝えられず、ひっそりと若い命を散らして行った。震洋に関して、なんと、２５００人以上が死んだともいわれている。中には、海軍の予科練で飛行訓

練をつんだ若者が、飛べる飛行機がないものだから、このモーターボートの操縦を命令されたケースがかなりあった（約１０００人）といわれている。

「飛行機はいいけれど、モーターボートはいやだ」などと言えたものではなかった。予科練とは、純真な若者たちをだまして死に導くための特攻隊員養成所になっていたわけだ。

大房岬に震洋部隊が配置された記録はないという反証がありそうだが、この海岸は広域的に館山湾の一部となっており、本土決戦のために館山須崎に配置された震洋部隊（第５９震洋隊）が構築した一部だろう、と考えれば納得できる。

魚雷か震洋かは、ともあれ、ここに残る跡は軍事的な遺構であることは間違いない。

⑥鶴見線沿線の機銃弾跡（神奈川県川崎市）

2021/3/16

空からの機銃掃射の跡が二カ所、ともに川崎の鶴見線沿線にあることを新たに知ったので、私は３月１６日（火）午前中に一つの用事を済ませた後、いそいそと出かけた。神奈川県内なら、比較的たやすく行ける。

鶴見線は、鶴見駅から海岸の工業地帯を走るローカルな支線であり、基本は単線だ。そこで働く人たちが主に利用している。近年テレビで、人名にちなんだ駅名が複数あるということで取り上げられていた。この地帯は、明治・大正期に埋め立てられたもので、その人名とは、埋立事業や工場建設に係わった企業の代表者などだった。

最初の目的地がＪＲ国道駅だ。鶴見駅から一駅めにある。これは奇妙な駅名だが、単に国道１号（今では１５号）のそばにあるから名付けられたという。

私は横浜を経由して京急の「花月園前」駅から歩いて国道駅に行こうとしたが。駅名が近年「花月総持寺」に変わったのを知らなかったから、降り損ねてしまった。しゃくだから（？）京急鶴見駅から歩いて国道駅に行った。

戦時中の機銃掃射の跡の一つが、国道駅の入口横の壁にある。駅の改札から国道方面に出れば、すぐのところにあるのだから、容易に探せる。

当時、駅が米軍機の機銃射撃の主要な目標の一つになっていたようで、他に、以前の探訪記で取り上げた二宮駅のプラットホーム屋根に、さらに高尾駅のそれにも銃撃跡が今でも残されていることを最近知った。

国道駅の入口外側の壁に銃撃跡が残る。看板が掲げられていたと思われる高さのコンクリート壁面にランダムな大小の穴が１０カ所ほど見える。実際はここだけでなく、他の部分も機銃掃射されたはずだが、修復されたのだろう。金網で囲っているのは隠す目的もあるのかもしれない。

後日の情報によると、駅の高架下の壁にも銃撃跡が残っているそうだが、私は見落とした。

国道駅の入口壁面に残る弾痕
コンクリート部分に約１０カ所の弾痕がある。破片が落ちないようにするためか、金網で囲い、保護している。

その高架下には、住居や商店などが押し込まれたように建てられている。戦後そのものの風景だろう。昭和レトロの雰囲気があることで、懐古的なマニアに注目されている場所だが、時代の波を受け、その面影を失いつつある。

もう一カ所の銃撃跡を見るために、国道駅から電車で武蔵白石駅に移動した。なお、この駅は日本鋼管の

国道駅の改札口近辺
高架下には、通路を挟んで両側に居酒屋などが並んでいる。

白石元治郎にちなんで名付けられた。
線路は武蔵白石駅からさらに支線が伸びて大川駅に続いている。距離的には、銃撃跡に行くためにはその駅からの方が近いが、大川駅に行く電車はかなり限定的な時刻のものしかない。私が乗った電車は、武蔵白石駅どまりだった。
大型トラックが多く行き交う直線道路の脇を歩いてゆく。両側には大きな工場や倉庫が建ち並ぶ。それらは少々古さが感じられる、なにやら匂いが、かすかに漂ってきた。長居はしたくない地域だ。
大川駅方面に行く途中、白石運河を渡る橋がある。大川橋という。事前の情報どおり、その鉄道橋の側面板に銃撃跡がある。鉄道橋と並行する道路橋からそれがよく見える。
高さ８０センチほどの側面鉄板が撃ち抜かれ、１０以上の穴が開いている。これらは、米軍の戦闘機Ｐ５１（硫黄島から飛来していた）の機銃掃射によるものといわれている。幅２０センチほどの水平の鉄材には弾痕がないから、これは張り替えられたものと思われる。
橋の中央付近に貼られたプレートによると、２０１７年１０月に塗装を新しくしたとある。確かに、スカイブルー色に塗られ、見た目は新しいが、実は古いものだ。これだけ弾痕がある鉄材をそのまま長年に渡って使用し続けているＪＲの経営事情が垣間見える。つまり「こんな利用度の低い路線には、金をかけたくない。少々体裁が悪いかもしれないが、強度に問題ないなら、ペンキの塗り直しで充分だろう」という方針のようだ。

大川橋の弾痕跡
梁（はり）構造で線路の両側を支えている鉄道橋の側面に、１０以上の貫通痕がある。

⑦予科練平和記念館と自衛隊武器学校（茨城県阿見町）2021/3/25

予科練平和記念館と自衛隊武器学校は隣接しているので、午前と午後に分けて探訪した。探訪というより見学というべきかもしれない。

３月２５日（木）私は早めに家を出て、上野駅始発の常磐線快速に乗った。土浦駅からバスで阿見町に行った。バスの中で長い時間をかけて見に行く価値があるのだろうかと、ふと疑問がよぎった。

阿見町の霞ヶ浦沿岸部にそれらがある。午後に武器学校で展示品見学の予約を入れていたから、午前中は平和記念館を見て回るスケジュールにした。

この地は、かつて土浦陸軍航空隊の基地だったが、海軍が、昭和１４年から横須賀から予科練の移転に伴い、子どものうちから教育訓練する中心的な場として施設や指導体制を本格的に整えた。なお、横須賀での予科練は昭和５年に創設された。

戦後、旧海軍から敷地を受け継ぎ、今では陸上自衛隊が使用している。陸上自衛隊土浦駐屯地だ。この広いエリアの中に武器学校があり、今日私が見学したい戦車などが置かれている展示コーナーがあるわけだ。

予科練平和記念館はその隣の地域に建てられ、広々とした周辺は公園や駐車場に整備されている。

回天と予科練平和記念館
回天の全長は約１５メートル、総重量８．４トンだから、そうとう大きい。塗装は訓練で使われたものに合わせたという。左側に桜。
背景の建屋が予科練平和記念館。

建屋の外に置かれた人間魚雷「回天」や、別棟のテント屋根の下にあるゼロ戦二一型の実物大のモデルを見るだけで、私は満足なのだが……。これらは実物そっくりの複製品で、精密に再現されている。

なお、ゼロ戦は、パイロットを敵の銃弾から防護す

る工夫が二の次になっていた。軍がメーカーにそれを要求したからだ。急降下速度の制限があったなど、機体が脆弱だった。

ゼロ戦二一型の実物大モデル
二一型は大戦の前期に生産され、それなりに活躍した機体だ。
その前で不審者が見つめていた。

平和記念館の芸術的な建屋といい、内部の展示室といい、上質な作りだ。つまりだいぶ金がかかっているようだ。この記念館の設立や維持のために、そうとう潤沢な資金が集まったとみえる。大半の資金は、予科練の生き残った者や遺族たちの寄付によるものと推測される。彼らの悲痛な思いが込められた施設なのだろう。

平和記念館なるものを訪れるのは、私としてはやや気が重い。入場料５００円も払いたくない気分があるのだが、寄付のつもりで払った。

コロナ禍のためか、すいている平和記念館の中をゆっくりみて歩いた。それぞれの部屋で当時の様子が具体的に再現されている。

映像を見せる部屋の脇にいた学芸員風の係員に、映像開始時間まで間があったので、私は議論を吹っかけた。「モーターボートに乗って戦死した予科練の若者たちは何人いたんでしょうか」

「震洋のことですね、海上の特攻兵器。ここを出た人が震洋の部隊に配属されたのは、約１０００います。実際に出撃して亡くなった方は限定的ですが。飛べる飛行機がなくなったから、海上にふり向けられた。フィリピンのコレヒドールで戦死した人が多い。ほら、このプレートに載っている」

屏風のようなプレートに、配属された部隊名や戦死した場所、用いた兵器の種類の一覧がこと細かく書かれていた。

彼は話を変えて、桜花*1について説明を始めた。「飛行する特攻兵器として桜花があった。こちらの部隊は出撃したけれど、全滅した。護衛の戦闘機を伴って編隊を組み、母機で運ばれる途中、母機ごと全機落とされた」

その話は、私の知っている範囲内だった。

「作戦の失敗ですね。母機が敵戦闘機群に遭遇したら、ひとたまりもない。遭遇というより、彼らはレーダーで補足し上空で待ち構えていたんでしょう。特攻の戦闘機でさえも、重い爆弾を付けていたら、逃げることは無理でしょう」と、知ったかぶりの私が学芸員に話した。

「桜花の戦果として輸送船を沈めたことぐらいです」

そして私はかねてより言いたかったことを言った。

「予科練は、特攻要員を養成していたんじゃないですか？」

そのとき、映像の開始時間になったから、係員の見解を聞くことはできなかった。

*1. 人間ミサイルというべき兵器。ロケットエンジンで飛行するが、飛べる距離が限定されていたから、目標に近づくまで母機（主に一式陸攻）に運ばれた。

予科練平和記念館のパンフレットによると、飛行練習生過程を経て戦地に赴いた者たちの死亡率が極めて高い８割だった。約２万４千のうち約１万９千人が戦死したというのだから、驚かされる。

少年を予科練に送り出した両親の多くは、その後、別れの挨拶が書かれた手紙とともに、戦死公報を受け取ることになる。「特攻」と認定され、多少の恩給が加算されたとしても、悲しみは消えない。「こんな恩給はいらん！」と、封筒をほうり投げたくなる……。

予科練平和記念館の中と外を一通り見て回った私は、隣の自衛隊敷地内にある雄翔館へ行った。ここも予科練にちなんだ展示施設になっているとのことだった。

自衛隊管理区域でありながら、この一角には、だれでも自由に無料で入れる。記念館に近いフェンスの門扉が開かれていた。けれども、私が入ってゆくと、入り口近くの詰め所から歩哨のような隊員が駆け寄ってきたから、少々緊張した。コロナ対応のための体温測定や、記録紙に名前・住所・電話番号を書かせられただけだから、ありきたりのことだ。私を不審者と思って駆け寄ってきたわけではなかった。桜も咲いている天気のよい日だったが、この時間に私以外に入る人はいなかった。

雄翔館へ歩いていく途中にある庭園は、よく整備さ

れており、一見の価値がある。予科練にちなんだ石碑や彫刻が所々に置かれていることに特徴がある。

自衛隊駐屯地の中であり、金網状の柵で仕切られているだけだから、その内側がよく見える。ジャージ姿のジョギングしている人が柵に沿って走りすぎる。自衛隊員には見えない。訓練の一つだろうか。先ほどの歩哨は「見える範囲で写真をとってもよい」と言ったが、中に向けての写真は多くは撮らなかった。スパイ行為になりそうだから……。

庭園を回り込むように歩いてゆくと、雄翔館に着く。ここには係員の姿はなかったが、監視カメラが不審者を見張っているはずだ。

ここ雄翔館にも、やはり予科練にちなんだ資料や写真が多かった。背後の壁には、兵士たちの軍服姿の写真が多く貼られていた。遺影のような写真を見るのは、少々気のどくになる。

航空機などのプラモデルが多く展示されている棚もある。なかなかよくできている模型だが、縮尺サイズがばらばらなので、比べにくいところがある。

展示品の中に、問題の震洋の模型があったので、写真を撮った。予科練平和記念館の中では撮影禁止だったが、ここではフラッシュをたかなければよい。

震洋の模型
一人乗りのモーターボート。

雄翔館の建屋は、航空母艦を模して形作ったという。屋上は空母の飛行甲板に相当するわけだ。私は、屋上に上ってみたが、空母を思わせるものは無かった。

ここを去るとき、雄翔館の玄関前に置かれていた銅像が山本五十六のものと知った。彼は航空兵力の重要性を早くに認識し、予科練の創設に尽力したという。

でも私は、真珠湾攻撃のとき、開戦時に早くも、特攻兵器の特殊潜航艇を用いたことに引っかかる。

雄翔館 屋上からの風景
柵の向こうは武器学校の展示エリア。
中央に桜の下で並ぶのは、歴代戦車。
手前に山本五十六の銅像が立っている。

５隻１０人で出撃したものの、座礁した艇の一人が生き残り、捕虜になったが、軍人勅諭に反したことで、さいなまれることになった。彼は攻撃にも自爆にも失敗した。山本五十六のようなエリート軍人は人命軽視の作戦ばかりを立案し、自分たちは後方にいて部下に無謀な出撃命令を出していた。

午前の部を終え、少々時間待ちしてから、午後一時半に武器学校の正門に入った。正門には自動小銃を手に持った戦闘服姿の隊員が警備しているから、物々しい。雄翔館のあるところは裏口にあたるけれど、そこからは入れない。

受付で、なんと、本日の見学者は私一人であることがわかった。自衛隊広報活動の一環として、一般の見学を許可しているが、自衛隊駐屯地に一般人を自由にうろうろさせてはくれない。予約のときに日時が指定され、説明する隊員が一人つく。挨拶のときに名乗ったが、名前をXさんとしよう。一対一で一時間あまり説明を受けるのだから、かなり贅沢な見学になった。

物置のような火砲館から見て回る。１９世紀のクルップ砲（ドイツで開発された）から、近年の１５０ミリ砲まで、人が操作した大砲が並んでいる。他国製のものも含まれる。それらは武器学校として生徒に対する教育実習のために使うというわけではなく、単に管理している場所となっているという。学校では、現用武器の修理やメンテナンス方法を教えているという。

Xさんは、戦車の操縦にも経験をもち、一通りのことを知っている人で、私のぶしつけな質問にも、ほとんどごまかさずに答えてくれた。なかなか楽しい、興味深い一時間だった。写真も好きなだけ撮らせてくれ

た。ただし、現用武器の射程距離など性能に関するところは、さすがに直答してくれなかった。

八九式中戦車
これは復元し、修理して動くようにした。旧軍の戦車で可動なものはこれだけという。

銃砲や戦車は、自動化や精度の向上が求められ、常に改良が加えられているという。世界的な標準化も進められ、主流となっているものがあるという。主流から外れたものは、製造が難しく使いにくいことになる。

次は戦車だ。日本で作られた戦車のほとんどの種類がここに保管されている。ここにある戦車で一番の目玉は、旧日本陸軍の八九式中戦車だろう。

八九式中戦車は、みるからに旧式のものだが、日本陸軍の代表的な戦車だ。４００両以上作られた。戦時中、中国大陸や南方方面に出て行った。しかし、ほとんど破壊されたから、残っているのは珍しい。

三式中戦車
近代的なスタイルをしている。本土決戦用に、温存された。

これは復元され、近年動くように改造されたから、ニュースにもなったものだ。エンジンを入れ替えたり

して改造されたといっても、外観はオリジナルのものに近い。

その隣に並べられているのは、三式中戦車といい、旧日本軍の戦車の中では最新鋭のものだった。１６６台が作られたとされるが、本土決戦に備え、終戦まで温存されたから実戦には使われていない。そのためか、首都圏の所々に戦車を隠すために掘られた地下壕（戦車壕とも称される）という伝説のある横穴がある。出し惜しんだから、沖縄戦にも投入しなかったとみえる。

戦後、ほとんどスクラップにされたが、例外的に残された2台のうちの一台だ。もう一台はアメリカに渡ったとされる。

これはアメリカ軍の主力戦車Ｍ４シャーマンに対抗するために開発されたというが、仮に実戦になったとき対抗できたかどうかは、きわめて疑わしい。射程距離はＭ４シャーマン戦車の半分しかないという。

そのＭ４シャーマンも、この武器学校に並べられていた。それは野外であり、こちらの三式中戦車は屋根付のガレージに置かれている。貴重品扱いされている。

戦車については、戦後作られた陸上自衛隊の６０式から最新鋭の１０式まで一通りそろっている。Ｘさんの得意分野らしく、それぞれの特徴や防護技術の進歩など、比較的詳しく説明してくれた。

見学コースから、旧・医務課第一病棟がよく見える。これは昭和１６年に建てられた歴史的な建屋であり、貴重かもしれない。昭和２０年６月の空襲では、この周辺地域は壊滅的な破壊を受け、負傷した予科練習生がここに運び込まれたという。

旧・医務課 第一病棟
当時の建屋が残っている。耐震性がないという烙印が押されが、東日本大震災では特に問題なかったという。